

新刊紹介

フィールドの環境科学

—現場での感動と調査に立脚 基礎から論文執筆まで—

中村 圭三 著

青山社

2007 年 7 月発行, 250 頁, 2500 円 (税込)

ISBN978-4-88359-254-8

現場での感動と調査に立脚
フィールドの環境科学
基礎から論文執筆まで



環境科学とは、どの分野に該当するのであろうか。勘違いがあるかも知れないが、私は次のように考えている。

自然現象など、追究していくあるいは変動を調査していく、とするならば理学であろう。しかし、現在では、環境科学を考慮しなければ、ものづくりはできなくなりつつある。そう考えると、人間が利用できるものづくりを目指している工学もまた、環境科学の分野といえよう。まさに、環境科学は、人間に関わる、人間のための、人間学分野といえるのではないだろうか。

現在、環境科学における知識については、地球温暖化を代表として、一般人も豊富となりつつあり、興味を持たれている内容である。本書は、そんな環境科学についての、フィールドワークを中心として教育・研究活動が続けてこられた敬愛大学国際学部教授 中村圭三先生の最新の書である。

本書は、第1部「気象・気候のフィールド環境調査」、第2部「大気・水環境のフィールド調査」、第3部「環境教育」の3部から構成されている。

第1部では、クロアチア（旧ユーゴスラビア）における局地風「ボラ」に関する調査研究（第1章）、長野県菅平高原での夜間の斜面上の冷気流に関する調査（第2章）、北海道オホーツク海沿岸の海水と気象・気候に関する調査（第3章）、そして北海道での動植物と首都圏での空中花粉についての生物と気象に関する調査（第4章）が記載されている。各章とも、長年の調査方法や調査結果、そしてデータ解析まで、詳細にわかりやすくまと

められている。特に、観測機器による気象データの解析だけでなく、偏形樹を観察するなどした結果なども踏まえて、実際に目で見た状況判断なども述べられている。

第2部では、千葉県北部での酸性雨に関する調査（第5章）、北海道川上郡にある浮島湿原での高層湿原の水環境に関する調査（第6章）、ベトナムでのメコンデルタの生活用水に関する調査（第7章）について記載されている。各章とも、大気・水環境のデータ解析だけでなく、植生を踏まえて述べられており、研究活動を行う上での洞察力の広さが感じられる。

最後の第3部では、第2部までの研究成果ではなく、敬愛大学佐倉キャンパスの大学教育に導入している環境教育システムの検討（第8章）と、その環境調査事例（第9章）が記載されている。ここでは、ただ単に、環境科学教育として数値的なデータを調査するだけでなく、学生の負担なども考慮し、現在の大学教育における問題点の解決方法の一端が述べられている。また、学生に季節感を目覚めさせることなども考慮されており、環境科学の知識教育だけでなく、人間教育を実施するための苦勞も感じられる。

本書は、研究論文をまとめているところもあり、研究結果としては、真新しいものはないかも知れない。しかしながら、様々なところに、研究を行う上での着目点が記載されて、また、研究だけでなく、教育的な内容もあり、今後、大学の教員を目指す者、研究者を目指す者にとっては、非常に参考になるだろう。

本書のまえがきに、中村先生の言葉として、「研究は、感動に始まり、感動に終わるものであり、この感動が、次の新しい感動を呼び起こす。その結果、現象の解明への関心は果てしなく深まり、研究は継続していくものである。」とある。これこそが、研究の基本であり、また、教育活動に携わっている者が忘れてはならない言葉であろう。まさに、環境科学が人間学分野に属することが実

感できるだろう。研究・教育者を目指す者、あるいは研究活動に自分の行き先を見失っている者には、この言葉を教訓として、自分の目指す道を探して欲しい。その道標となる一冊として、強くお勧めしたい。

(美作大学 松村光太郎)

(2008 年 2 月 1 日受付)